

令和4年度第2回鳥取県総合教育会議 議事録

1 日 時

令和4年11月18日（金） 午前10時から午前11時40分まで

2 場 所

鳥取県庁 第3応接室等 オンライン会議を実施

3 出席者

知事 平井伸治

教育長 足羽英樹

教育長職務代行者 中島諒人

教育委員 若原道昭

教育委員 佐伯啓子

教育委員 森由美子

教育委員会事務局 次長 林憲彰

教育委員会事務局 教育次長 中田寛

有識者委員 石原太一

有識者委員 大羽沢子

有識者委員 坂本哲

有識者委員 永見真

有識者委員 福壽みどり

有識者委員 堀江愛

有識者委員 山下誉議

事務局 子育て・人財局長 中西朱実

子育て・人財局家庭支援課 戸井歩

子育て・人財局総合教育推進課 藤田博美

4 意見交換

- ・学力状況と対応策について
- ・次期『鳥取県の「教育に関する大綱」』の方向性について
- ・県立美術館の開館に向けて

5 報告事項

- ・鳥取県版子どものアドボカシーの試行実施について
- ・ヤングケアラーの支援に向けた取組について
- ・県立倉吉東高等学校への国際バカロレア教育導入について
- ・県立夜間中学設置の進捗状況について

6 あいさつ

(中西局長)

- ・令和4年度第2回目鳥取県総合教育会議を開催する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げる。

(平井知事)

- ・本日は、朝からこのようにお時間をいただき、熱心なご討議をお願いすることに感謝申し上げます。また、日頃は、子どもたちの未来を考えて、様々な分野でご貢献いただいておりますことに、改めて感謝を申し上げます。
- ・本日は、委員の皆様、そして教育委員の皆様を交え、これからの教育の方向性、大綱を定めていく、いわばキックオフのような形になる。
- ・現在、鳥取県の教育をめぐる環境として、残念ながら、子どもたちの学力調査では全国平均を下回っている。一様に下がってきて、全国を下回るとするのは、良いことではないと率直に言わなければならない。そういう意味で、これから、これを次の大綱の期間でどう改善をしていくことができるのか。かつては全国的にも、国語などは優位にリードをしていた、そういう時期があったけれど、どんどんと低下傾向にある。
- ・また、残念ながらコロナの状況については、足元のことであるが、やはり今第8波が隆盛を極めようとしており、現在はB A. 5という株がほとんどを占めているが、この系統から流れ出るB Q. 1は、或いは別のB A. 2の系統から発生してくるX B Bなど、新しい株も国内で検出されている中、全国ではすでに上がり始めているということである。恐らく、今後新しい株が入ってくると、さらに上昇の速度が速まるのではないかと懸念されている。
- ・学校がその感染の舞台になっていることも、残念ながら認めざるを得ないところであり、本県では、市町村の教育委員会も含め、一緒になって何とか早めに収めようとしているところであるが、それでも、部活だとか、子どもたちの行事、そういうものを中心に広がっている。
- ・さらには、最近ちょっと注目すべきなのは、教職員の間で、職員室などの機会かもしれない。かなり大型のクラスターが発生して、下手をすると学校機能の低下、停止に追い込まれかねないことでもある。
- ・このため、そうしたことに対する対策をしっかりとやりながら、ただ学びの機会ではできるだけ継続をしていく。子どもたちの活動も、注意すべきことを注意しながら続けていく。そういう方向性というのが多分大事であり、これからどういう感染症が今後あるかもわからないので、そうした感染症対策も大綱の期間内で、さらに整備をしていくことも重要な新しい課題なのだと思う。
- ・4年間を見渡してみると、エポックメイキングなことがいくつかある。
- ・一つは、この週末にフォーラムをやることになっている、国際バカロレアの学校が誕生することである。英語教育はもちろんのこと、国際人としての教育、これを本格的に始める、そういうチャンスになるかもしれないし、子どもたちや保護者の皆様の、いわば目線が変わってくる、一つ実験的な事業ともいえると思う。
- ・また、県立の夜間中学。これによって学びの機会を保障していこうというのも、この大綱期間の大きなエポックになるかと思う。
- ・そしてもう一つ、最近、全国的にも注目されているのが、県立美術館の開館である。この県立美術館の開館を、子どもたちの育ち、ラーニングセンターとして活かしていくこともあろうし、県民、みんなの芸術に対する理解を深めていくことにもなるのかもしれない。
- ・ブリロの箱の話も皆様と共有する必要があるだろうと思っている。個人的には非常に興味深くも見ているところであり、ちょうど60年前に、世界を跨いで、特にヨーロッパ、アメリカを中心として、いろんな議論が戦わされ、こういうものは芸術じゃないという感情的な議論もあれば、こういうものを芸術として、みんなで承認していこうと。そういう中で、議論の末にポップアートというのが現代美術としての地位を確立してきた。
- ・期せずして、今まで美術館もなかった鳥取県で、同じ論争が今起こっているわけであり、これを上手く集団体験することができれば、芸術に目覚める子どもたち、或いは感性、そうしたものの養成にも役立つのではないかと思うし、美術館をつくる本当の意味もあるかもしれない。
- ・そういう意味で私自身は昨日、短兵急に事を構えて、今良いか悪いかを議論するよりも、実際に学芸員の

皆さんが一生懸命考えた結果なのであろうし、全国の専門家の皆様も、ある意味興味深くこの論争を見ているところで、そうであれば、開館して、ちゃんとしたギャラリーの中でこの作品の意義というものを実際に見せながら、県民みんなで、また来館者で、それを判断してもらう期間があってもいいのではないかと考える。

- ・ただ、残念ながらこれについては、予算の使い方についての議論も同時に沸き起こっており、予算の執行のやり方については、当面抑制的に考える必要があるかなと思っている。
- ・いずれにしても、これだけの騒ぎになったことを、いわば奇貨として、奇貨としてと言うと語弊があるかもしれないが、言わば一つの炎上商法だと思っていた。こうして、美術館があるぞという存在感がすごく高まったことは事実であるし、鳥取県が本気で現代美術を考えようとしているのだなというのも、多分学芸員の狙いは、期せずして全県民や全国に伝わったと思う。
- ・ただ、忘れてはならないのは、税金でやるものであるし、県民立という大事なコンセプトを我々は大切にしていかなければならないので、多くの方々の理解を得るには、60年かかって今ここに現代美術が評価され、現在関西ではウォーホルの展覧会が二つも開かれている。そういうような状況に鑑みれば、時間をかけた議論を県内でもやっていく。そういう呼びかけが必要かなと思った。
- ・従って昨日、教育委員会の皆さんにお話したのと同じ話を記者の皆さんにも申し上げて、申し訳ないが、今朝から騒ぎになっている。そんなわけで、その点についても緊急に議題として上程した方が良いのではないかと考えている。よろしく願い申し上げます。

(中西局長)

- ・続いて、足羽教育長に挨拶をお願いします。

(足羽教育長)

- ・今回も新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインでの開催となったが、皆様ご多忙の中、この第2回総合教育会議にご参加いただいたこと、そして平井知事をはじめ、委員の皆様方には日頃から本県の子どもたちの教育の推進に深いご理解とご協力をいただいていることに感謝申し上げます。
- ・先ほど知事からも話があったが、新型コロナ感染も第8波の入口と言われており、本県でも学校行事や部活動を中心に感染が急増し、クラスターが連日のように起こっているところである。社会経済活動と同様に、この子どもたちの学び、そして教育活動も継続していくためにも、健康管理、そして、早期の囲い込み、さらには、寒くなってくる時期、換気の徹底、そうした基本的な対策の原点に立ち返って、子どもたちの学びを守っていききたいと考えている。
- ・本日の総合教育会議では、次期「教育に関する大綱」の方向性をはじめとして、本県の継続した課題である学力向上の問題、さらには、先ほど知事からも説明があった県立美術館開館に向けての基本的な作品購入等の考え方について、委員の皆様からご意見を賜りたいと思っている。
- ・「全国学力・学習状況調査」については、この夏に本年度の結果発表があったが、今年も残念ながら全国平均を下回る結果となった。そのことを謙虚に受けとめつつ、一方で、県独自にお願いして進めている、児童生徒一人一人の個々の伸びといったものに注目した鳥取県独自の「とっとり学力・学習状況調査」と「全国学力・学習状況調査」を絡めながら、この二つを両輪として、子どもたちの学力向上を図る取り組みを進めて参りたいと思う。
- ・また、不登校の課題をはじめ、その他にも多くの教育課題があるが、教育に関する大綱で方向性を定め、教育の振興基本計画とも連動させながら、児童生徒一人一人に向き合う、迫る、そんな取り組みを今後も市町村教育委員会と連携して進めていききたいと思っている。
- ・限られた時間ではあるが、鳥取の子どもたちが自らの人生を生き生きと輝く、そういう姿がたくさん見られるような取り組みを、力を育むため、委員の皆様方からご意見を頂戴したいと思う。本日は、よろしく願い申し上げます。

7 意見交換

(中西局長)

- ・意見交換に移る。本日の議題は、「学力状況と対応策」「次期『鳥取県の「教育に関する大綱」』の方向性」「県立美術館の開館に向けて」、報告事項として、「鳥取県版子どものアドボカシーの試行実施」「ヤングケアラーの支援に向けた取組」「県立倉吉東高等学校への国際バカロレア教育導入」「県立夜間中学設置の進捗状況」についてである。最初に、議題から報告事項まで一括して資料の説明をし、その後、有識者委員、教育委員の皆様からご意見を伺う。まず、「学力状況と対応策」について、教育委員会から説明をお願いする。

(中田教育次長)

- ・今年度実施された「全国学力・学習状況調査」と、県独自に取り組んでいる「とっとり学力・学習状況調査」の状況、分析、今後の対応策についてお話をさせていただく。
- ・「全国学力・学習状況調査」は、本年度、小学校、中学校ともに理科も実施された。結果は、小学校の理科、中学校の国語、数学、理科は全国平均と同等であったが、小学校の国語、算数は全国平均を下回る、残念な結果となっている。
- ・昨年度後半より、県と市町村とで、これまで以上に連携を密にしながら取り組みを進めて参ったが、まだ目に見える形の成果としては現れていない。分析してみると、ネガティブなところばかりではなく、明るい兆しが垣間見える部分もある。
- ・例えば、「思考力・判断力・表現力」を問う問題や、記述式の問題に対する正答率等、低かった部分が、学校への指導の継続、また、学校の先生方の御努力により、改善の傾向も見られるという状況もある。
- ・次に、「とっとり学力・学習状況調査」についてであるが、国語と比較すると算数の伸びが大きいというような状況が、全体としては見られる。継続して取り組んできた算数の全校訪問をはじめとする、算数の強化の取組の成果も現われてきていると感じている。
- ・また、この調査の大きな特色である非認知能力や学習方略といった、学力を下支えする力も、全体の傾向としては着実に力を伸ばしていることが見て取れる。日々の学校での取り組みの成果かと思う。
- ・しかしながらこの二つの調査を両方とも見てみると、国語に課題があるということもわかってきている。全体的な底上げについて、今後しっかりと対応していく必要がある。今後の対応策としては、現在進行形のものも含め、次の五つのことを考えている。
- ・一つ目に、調査結果を市町村と共有して、連携した取り組みをさらに強化すること。足羽教育長自ら、県内全市町村長を訪問する計画を立てられ、今進めているところである。本県学力の現状、そして、危機感を市町村長と共有するとともに、協力して学力に向上に取り組むことについて、共通理解をしっかりと図っているところである。
- ・二つ目に、「とっとり学力・学習状況調査」を活用して、学力の状況を経年で把握できる分析シートを活用したい。個別最適として個に寄り添った学習、家庭との連携、こういうものに活用していきたいと思っている。
- ・また、学校に返ってくるたくさんのデータを基にした、管理職を対象とした学力向上に係る学校マネジメント研修を実施したり、「とっとり学力・学習状況調査」の校内における有効活用のあり方について、研修を進めていきたい。この「とっとり学力・学習状況調査」をしっかりと活用していく取り組みを進めて参る。
- ・三つ目に、「全国学力・学習状況調査」の結果から見られる「活用力」「応用力」といった、今求められる学力を育成する授業づくりのさらなる推進に取り組んで参る。教員研修用の資料をたくさん作っているので、それを県全体でしっかりと徹底して参りたいと思う。
- ・四つ目としては、教員の指導力。やっぱりここはキーになるところである。今コロナ禍で、なかなか対面ということが難しい状況にもあるが、オンラインの研修、そして研修で使える教材等もしっかりと作っていったり活用したりしていきながら、教員指導力を高めていきたいと思う。
- ・五つ目としては、冒頭に知事の話の中にあっただが、国際バカロレアがスタートする。それを契機に、英語教育の充実にも取り組んで参る。
- ・現在、県内全中学校の2年生に実施している外部調査の結果を市町村教育委員会と共有したり、指導主事に

よる学校訪問をしたり、国際バカロレア認定をきっかけに、本県における英語教育推進の機運を高めていくような取り組みを本年度、そして来年度に向けてさらに充実をしていきたいと思っている。

- ・令和元年に策定した学力向上推進プランに沿った取り組みを進めてきて3年半であるが、残念ながら目に見える形での報告ができてない。そういった現状をしっかりと受けとめて、どういったことにどこまで取り組んでいくか、スモールステップのゴールを具体的にイメージしながら、鳥取の子どもたちに確かな学力をつけていくことができるよう、取り組みを進めて参りたいと思う。

(中西局長)

- ・続いて、「次期『鳥取県の「教育に関する大綱』』の方向性」について、総合教育推進課に説明をお願いする。

(藤田課長)

- ・資料 13 ページをお願いする。鳥取県の教育の大綱は、4 ヶ年を一つの区切りとして、中期的な取り組み方針を第1編で定め、第2編で毎年度の重点取り組み施策と指標を定める二部構成でPDCAサイクルを回して施策の推進を図ってきた。本年度は、現在の大綱の最終年度であり、次の令和5年度から8年度までの4年間の大綱に定める中期的な取り組み方針についてご意見を賜りたい。
- ・資料では、事務局が考える次期大綱の方向性を示している。構成はこれまでの二部構成を継承し、国、県教育委員会において改定作業が進んでいく教育振興計画の内容も参酌しながら、コロナ禍や少子化の進行など、社会情勢をはじめ、学力の伸び悩みや不登校の増加など、本県の状況を踏まえ、対応する取り組みを盛り込んでいく。
- ・大まかなスケジュールであるが、本日、大きな方向性について皆様からご意見をいただいた上で作業を進め、次回2月に予定する総合教育会議で素案をお示しし、練り上げを進め、令和5年度第1回目の総合教育会議に最終案をお示ししながら、7月には次期教育大綱を策定したいと考えている。
- ・14 ページには、次期大綱の中期的な取り組み方針案を、主な取り組み例とともに記載している。
- ・現大綱を継承し、取り組みの柱として五つ掲げており、一つ目の学校教育の柱では、令和8年度以降の県立高校のあり方を見据えながら、地域づくりにも繋がる、県立高校の魅力化、国際バカロレア教育導入による探究的な学びの展開、英語教育の充実や、わかる、伸びる、こういったことを重視しながら、学力の向上を盛り込んで参りたい。
- ・二つ目の社会教育、キャリア教育などの領域では、地域社会全体で子どもを育むことを念頭に、改めて教育地域コミュニティとの繋がりづくりを進めるほか、産業界との連携を深め、魅力ある企業や経営者を直に知り、刺激をいただくようなふるさとキャリア教育を充実して参りたい。
- ・三つ目の学びのセーフティーネットの柱では、令和6年に開校を控えた県立夜間中学における教育活動や学校以外の多様な学びの場、学び直しの機会の充実を進めるほか、子どもたちの自己有用感を重視しながら、困難な環境にある子どもたちへの支援を強化すること。そして、教職員の働き方改革を盛り込む。
- ・四つ目の特別支援教育では、共生社会の実現に向け、関係機関と連携し、幼児期から切れ目のない支援体制を構築していくこと。
- ・五つ目のスポーツ文化振興の柱においては、部活動の地域移行を見据えたスポーツ文化活動環境の充実のほか、文化芸術に触れ、アートを通じた深い学びを推進したい。

(中西局長)

- ・続いて、「県立美術館の開館に向けて」について、教育委員会に説明をお願いする。

(尾崎美術振興監)

- ・これが今、世間を大変お騒がせしているブリロである。正確に言うと、ブリロを使ったおもちゃである。アンディ・ウォーホルという作家が作り、今、知事の話にもあったが、京都で開催している展覧会で、昨日で10万人の入場があったと言われている。
- ・ウォーホルは、1960年代アメリカで勃興したポップアートの代表的な作家と言われており、この度、このブリロという作品を3億円で5個、購入することができた。昨日知事が言及されたアーサー・ダヴという人の本を見ていただくと、レンブラントに書かれている人物がブリロを見ている。だから、このブリロと

いうのは、ブリロ以前、ブリロ以後で、美術史が変わるような、そういった作品だと思う。ただ、これを買ったことで、非常に唐突感をお持ちかと思うので、それについて説明させていただく。

- ・美術館を開くことになり、我々はいろんなことを考えていた。その一つとしてコレクションの充実である。これまで県立博物館では、鳥取県にゆかりのあるという、美術作品を収集して参った。しかし、せっかく良い美術館ができるので、それをさらに広げて、より広範囲の優れた美術作品の収集を図ることにした。
- ・画面上でご覧いただいている資料の1「鳥取県美術」というのがこれまでの収集方針であったが、それに加えて「国内外の優れた美術」、それから「同時代の美術の動向を示す作品」という二つの新しい方針を立てて、2年ほど前から収集を始めている。
- ・それで、このブリロの箱は、このうちの「国内外の優れた美術」の3「戦後の美術・文化の流れを示す優れた作品」のうち、さらに、美術の前衛精神を含む作品ということで購入した。
- ・ただ、このコレクションポリシーの拡大というのが一般に知らされていなかった。このブリロを買ったということで、非常に唐突感があったと思われ、それについては我々も反省している。
- ・しかし、このブリロの箱というのは、作品としても非常に価値のある意味のある良い作品である。そして日本では、立体は他に収蔵されていない。
- ・それから、やはり重要なのは、我々の美術館の一つの方針として、このアートラーニングセンターで、アート・ラーニング・ラボ (A.L.L.) という機能をつけようと思っている。ここではすべての人がその美術を通して学びを深めるという趣旨の機能であるが、まさに、このブリロというものは、「一体これは何だろう」という問いかけが始まって、ちなみにこれはなぜかという、これはアメリカでよく売っている洗剤をまぶしたタワシを梱包した箱であるが、そういったものを「いったいなんだろう」と思う。そこから始まってその美術に対する新しい見方が開けていくという点で、まさに我々の考えているアート・ラーニング・ラボにふさわしい作品かと思う。
- ・だから、ご存じのように高額だったということで議論を呼んでいるが、昨日、知事のお話にあった通り、3年間、これをきっちり展示して、それできちんとした文脈で紹介していくことによって、この作品は鳥取県にふさわしい、非常に良い買い物だったと、皆さんにわかっていたら私は確信しているので、今後、そういったものを周知、説明をしっかりと、美術館の中で扱っていきたいと考えている。

(中西局長)

- ・続いて報告事項である。「鳥取県版子どものアドボカシー試行実施」、「ヤングケアラーの支援に向けた取組」について、家庭支援課に説明をお願いします。

(戸井課長)

- ・最初に「鳥取県版子どものアドボカシー試行実施」について報告する。児童相談所の一時保護所で保護されている子どもたちが複雑な事情を抱えていて、自分の思いをうまく伝えられないことがある。そうした一時保護中の子どもたちが伝えたいことを、意見表明支援員が子どもと一緒に考え、それを児童相談所に伝えて、問題解決を図る。子どもたちにより良い対応ができるようにしようというものである。
- ・令和5年度からの本格実施に向け、2月上旬までの予定で試行実施を行っており、鳥取大学の先生と弁護士が意見表明支援員として、毎週1回児童相談所を訪問し、子どもと直接話をしている。今回のこの試行で得られたことなどを引き続き検討し、子どもの声を引き出す効果的な手法や、権利救済の枠組みを確立させ、新年度からの本格実施に繋げていきたいと考えている。
- ・続いて資料16ページをお願いします。ヤングケアラーの支援に向けた取組についてである。本県のヤングケアラー対策としては、令和3年度から、各児童相談所への相談窓口の設置や、中高生へのリーフレットの配布、実態調査などを行ってきた。今年度は新規事業として、LINEを使った相談窓口を設置したり、ヤングケアラー同士が悩みなどを共有できるようオンラインサロンを開設したりしている。また、電話相談については、教育委員会にもご協力いただいて、いじめ110番で、夜間と休日の電話相談を開始し、従来の電話相談とあわせ、24時間365日の対応が可能となった。そのほか、支援者のスキルアップのための研修や啓発事業にも取り組んでいる。
- ・資料18ページをお願いします。昨年度は中高生にリーフレットを配布したが、今年度は中高生版に加えて、

漫画を使った小学生版も作って、10月にすべての小中高生に配布したところである。

- ・関係機関との連携ということでは、11月11日（金）に対策会議を開催し、今年度の取組状況であるとか、検討中の来年度事業について話し合いを行った。その来年度の取組であるが、SNS上での集いの場、ヤングケアラーのいる家庭での家事育児支援、相談窓口を記載したカードの作成といったことを検討している。
- ・最後に、各市の取り組みということで鳥取市と米子市の取組を記載している。また、ここには記載していないが、先日の対策会議で、教育委員会から、校長会や校内研修などで、ヤングケアラーなどを課題として取り上げているとの報告もあった。引き続き、ヤングケアラーの支援と啓発に力を入れて取り組んでいきたいと考えている。

(中西局長)

- ・続いて、「県立倉吉東高等学校への国際バカロレア教育導入」、「県立夜間中学校設置の進捗状況」について、教育委員会に説明をお願いします。

(中田教育次長)

- ・資料24ページをお願いします。「県立倉吉東高等学校への国際バカロレア教育導入」についてである。令和4年度認定に向けて準備を続けて参り、9月23日付で山陰初の認定校に認定された。国際バカロレア教育が目指す人間像が社会と繋がり、探究的な学びを展開する教育手法、大きな期待を寄せているところである。まずは周知をということで、11月20日の日曜日に国際バカロレアフォーラムを倉吉未来中心で開催する予定である。たくさんの方においでいただきたいと思っているので、よろしくお願いします。
- ・次に資料25ページをお願いします。「県立夜間中学設置の進捗状況」についてである。鳥取県の夜間中学、どういう学校を目指していくかということを知周するために、基本コンセプト案を作成して、パブリックコメントを経て、9月の定例教育委員会で基本コンセプトを決定した。目指す学校の姿として、「いろとりどり（色鳥取）に、ともに自分らしく学ぶ」ということで、世代や国籍、これまでの学びの経験の違いなどを超えた様々な人たちの思いや考え方に触れて、ともに学ぶ、そういう自分らしい学びができる学校を目指している。
- ・9月から10月にかけて校名募集をし、17件の応募があり、今、選定中である。10月にはシンポジウム、そして、この12月には体験学習等も行おう予定にしている。これも広く周知をしていきたいと考えている。

(中西局長)

- ・それでは有識者委員の皆様から議題等についてご意見を伺いたい。発言は4分弱ぐらいをお願いします。それでは、石原委員をお願いします。

(石原委員)

- ・学力に関する部分をまずはじめに申し上げる。効果測定がかなり詳細に可能になってきたと思う。これは学年の中だけではなくて、学年が上がっていくことでどう変化しているか、どう伸びているかということ、それから個人の変化・伸びが見えている。それに当たって、担任の先生だけで、「データがあるから君らで何とかしなさいよ」ということではなくて、学校全体で、チームでちゃんと取り組める。どういうふうに改善していくのかをチームで解決していく姿勢を崩さずにやっていただきたい。研修会がたくさんあると思うが、出てきたデータをどういうふうに扱うか、それに応じてどういうプラクティスがあったか、ベストプラクティスの発表、共有などをこれからどんどんしていくことになると思うが、そういう形で個人だけでデータを抱えて、何をしたいかわからないというふうなことになるように、気をつけていただきたいと思う。
- ・それから、学力調査の結果で、算数数学などで記述の問題とか考える問題、そういったものが向上しているのはすごく良いと思う。それで、国語に関して課題があるという話であるが、実際国語はすごく難しい部分があると思う。特に小学生の国語は、年齢を追うごとに成長していった個人個人の言語能力が向上していく部分もあると思うので、その授業が一体どこまでその子の国語力の向上に貢献できたのか、なかなかわかり辛い部分があると思う。
- ・特に、科目で専門になっている中学校とは違って、小学校の先生方一人一人が授業の認知の専門家だとい

うことはないと思うので、小学校の国語の授業づくりプロジェクトをやるというふうに書かれているが、そこが果たす役割は非常に大きいのではないかと思う。そこに期待している。

- ・それからもう一つ、データの活用に関しても、いろいろ蓄積があって、いろんな事できるようになってくると思うが、どうしても個人のプライバシーの部分とぶつかる部分も出てくると思うので、その辺りの取り扱いに気をつけていただきたいと思う。
- ・次に大綱に関して、大綱の方向性については特に異論はないが、この大綱を、せっかく設定してはいるのだが、現場の先生方にどれだけ伝わっているのか気になる場所である。知人が教員採用試験の勉強などをしており、文科省が出している指導要領などをしっかり読み込んで対策をしていたのだが、普段、現場で仕事をされている先生というのは、そういう、何か全体的な方針方向というのをどれだけ気にして仕事をされているのか、少し気になった。
- ・そういったものをちゃんと現場でやっていくのであれば、「こんな対応しないだろう」というような動きも、現場で話す機会が出てくる。その中でもちゃんと全体の方向性を、学校だから、「じゃあ、こういうふうな指導しましょう」、「こういうふうに対応しましょう」ということが、現場レベルでできるようになって欲しいと思うので、大綱を作って、それを現場に周知徹底させていくことをぜひお願いしたいと思う。

(中西局長)

- ・続いて、大羽委員にお願いする。

(大羽委員)

- ・石原委員が私の言いたいことの半分ぐらいを言ってくくださったので、重ならないように言いたいと思う。
- ・まず、鳥取の教育の常識が全国から見たら非常識になっていないかということ意識するべきなのではないかと思う。隣の岡山とか、広島とか、近県もそうであるし、この前兵庫県のある学校に行ってきたのだが、やはり何か違うと思ったことがある。
- ・今日はその中で、教員の育成についてお話をさせてもらおうと思う。足羽教育長が学校を回って行かれたり、たくさん研修をされているとのことだが、三つの観点でいうと効率化である。先ほど石原委員がおっしゃったように、現場の先生方にどういうふうにして効率的にその情報を伝えるかということである。
- ・危機感としては、多分、一番持っているのは教育委員会の先生方で、それから若手の方だろう。今まさに学校に入ろうとしている方々は、最新の情報を持って学校に入る。ところが、学校の中にいる人たちが、どれぐらいアップデートできているのかは分からない。だからそこは、私も石原委員と同じ意見である。
- ・アップデートの方法を、これだけ世間が言っているので、やはりICTを活用していく。例えば、足羽教育長が1回学校を回るとして、その学校が何時間その対応に時間を割くのか。「どうぞ、気軽に足を向けていただいて、何もしなくていいよ、気軽に来たから」といったような感じなら良いと思うが、やはり、それに向かって説明資料を作ってお迎えをして、といったようなことであれば非常に非効率だと思うので、それはWebで良いのではないかと感じる。
- ・だから、Webで良いということは、「いつでも足羽教育長にアクセスできますよ」ということなのである。多分、足羽教育長もそういうふうに思っているんじゃないかと思う。現場の声を足羽教育長が拾っていかれるのはすごく良いことで、でもそれは、最初に行くのは良いかもしれないが、やはり1回行っただけではなくて、その後どうなったのかフォローが必要かと思う。だから、そういうふうな形で効率化とアップデートが必要である。
- ・それから特別支援教育などに関して言うと、専門性をどう育てていくのかということである。今どんなふうな教員養成になっているのかよくわからないが、鳥取は非常に特別支援教育が進んでいると思って、私がここに来て8年ぐらいなるが、最近は何かちょっと違うなという気もしている。
- ・読み書き障がいの診断をすごく求められたり、算数障がいの診断をすごく求められたりするが、診断することへの責任を、診断後、教育はどういうふうに行かしていくのか。診断するのは医療の役目であるが。
- ・そのあと、この子たちにちゃんと個別の教育指導計画ができていないのか、それをチェックする機能を教育委員会が果たしているのか。果たせない原因があるとすれば、それはやはり、先ほど申し上げたような効率化、ICTを使った効率化でもって、いずれも教育委員会の先生方から指導を得られるというような形

のシステムを作らないと、これだけの大綱の中身をどう実現していくか、しかも少人数でやっていくかというの、かなり知恵を絞らないといけないのではないかということで、先生方のこれからのそういう工夫に期待したいと思う。

(中西局長)

- ・続いて、坂本委員にお願いします。

(坂本委員)

- ・まず、美術館の件について、私は専門でも何でもないので偉そうなことも一切言えないのだが、経済的とか経営者的な観点から見て、知事も先ほど炎上商法とおっしゃっていたが、そういう意味では、まだ開館する前から、世間に、鳥取の倉吉に美術館ができるということが周知されたのは、経済効果的にもものすごく大きいものが実際にあるのではないかと思っている。
- ・今後目指していただきたいと思うのは、やはり、どこにでもある美術館では意味がないと思うので、鳥取の倉吉にわざわざ行かないといけない、行きたくなるような、独自なり、特徴のある美術館になっていったらいいと思っている。
- ・次に学力の件であるが、今後、教育の大綱を作っていく上でも非常に難しい話で、例えば、鳥取県として「子どもたちの輝く未来」とはどういう状態なのか、どういう状態になっていけばその子どもたちは輝く未来に辿り着いたのかということをしかりと定義する必要があって、それを基に鳥取県の教育方針なりを決めていくべきなのだろうと思っている。
- ・ただ、それをやるには、例えばバカロレアのような話になると、国際的なリーダーを育てていこうという話になるので、国語と算数の、日本の教育の点数がすごく重要なのかというとそうではなかったりする。ある意味では矛盾が生じてくる部分ではあると思うのだが、ただ、子どもたちの多様性を考えると、県としては、多様なことに取り組んでいかなければならないということだと思うので、考えられる方法としては非常に悩ましいところだと思うのだが、一つの方向性として、我々が考える「子どもたちの輝く未来」はどういう状態なのかを想像しながら逆算していくようなことが良いのかなと思っている。
- ・教育の大綱で、デジタルとか、DXといった言葉が相変わらず連呼されていくのだが、これも同じであり、今の期間で、いろいろな課題もおそらく上がってきたので、そこに対して何をどうやって解決するのかということと、解決ができたならこういう状態になるということまで、これもちゃんとゴールを見据えた上で、逆算的に教育の方針なり教育の手法というのを考えていけば良いのかなと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、永見委員にお願いします。

(永見委員)

- ・まず学力の面であるが、もちろん調査を実施すれば、良い点とか改善しなくてはいけない点が出てくるのは当然のことだと思う。ただ今回は、夢や目標に対する肯定的な回答が増加しているというところは、非常に評価できると思う。この点は、私ども教育に携わる者にとっては、非常に喜ばしい結果でもある。わかったとか、できたというような、実感できる場面がもしかしたら増加しているのではないかと考える。授業改善という点において、ある程度評価できるのではないかと思っている。
- ・あとは、資料の学力向上戦略図にもあるように、やはり、PDCAサイクルをしっかりと回していくことだと考える。今年度の調査でわかった課題はもちろんであるが、このサイクルをしっかりと回していれば、新たな課題も見えてくるはずである。ひいては、一人一人に寄り添った指導と支援に繋がっていくと考える。チェック機能も含め、この点をよろしくお願ひしたいと思う。
- ・また、結果が思わしくないというところもあるので、他県の取組等を参考にすることも、やはり、今以上に必要になってくるのではないかと考えるので、よろしくお願ひしたいと思う。
- ・さらに、1人1台のタブレット端末の利用が開始され、この点と学力向上の相関が気になるところである。本校でも、やはり担当者、それから教科教員とで活用に差異が生じてきている。ICT支援員などの協力も得ながら、より有効な活用を指導しているところではあるが、ぜひとも、公私の枠を超えて、この点の情報共有、並びに活用研究会のようなものを実施していただければと考えているので、よろしくお願ひした

いと思う。

- ・次に大綱であるが、国のコンセプト、社会状況の変化等を勘案され、本県の課題も盛り込むという方向性に問題はないかと思う。ただ、働き方改革というのはどうしても進まない。そういうところもあるので、難しいところかもしれないが、短期集中型で取り組むべきもの、或いは時間をかけて取り組むべきもの、こういうふうに、何か住み分けのようなものができれば良いのかなと考える。

(中西局長)

- ・続いて、福壽委員にお願いします。

(福壽委員)

- ・まずは、足羽教育長、先日はPTA中国ブロック大会ですてきなご祝辞をいただき、感謝申し上げます。私もしっかり子どもたちと心を繋いでいきたいなと思った。
- ・「全国学力・学習状況調査」の結果についてであるが、果汁入のジュースを2人で分けると、果汁の割合が増えるか、減るか、変わらないかといった質問の正答率が全国で21%というので驚いていたら、鳥取県はさらに低く17%ということで、私はとても驚いた。世の中のことや生活のことと学びを繋げる手立てというのが、やはりもっと必要なのではないかと思う。
- ・また最近、ギフテッドという話題もよく聞くのだが、四半世紀ほど前、我が家に暮らしていたドイツ人の男の子は2回飛び級をしており、14歳で高校生として来日した。友達関係のことなどを思うと、どうなのかなと私もちょっと懐疑的だったのだが、そもそも、その当時、同級生とは興味関心が合わなかったようなので、それなら自分に適したところが良いのかなあと思った記憶がある。
- ・最近も朝のテレビ番組を見ていたら、いわゆる賢かった人は、わからないふりをして授業を受けていて、授業について行けなかった人は、わかったふりをしなくてはならなかったという話をされていたのを聞いて、結構いいことのない人がいるのではないかと思った。
- ・そう考えると、わかる子というのは、どんどん進められる状況とともに、9月に国連から勧告を受けていたが、やはりインクルーシブ教育を進めて欲しいと思っている。ヤフコメなどを見ると、障がいのある子どもがいるお母さんからは、「特別支援学校に守ってもらっているんだ」「必要だ」というような意見が多かったのだが、それは子ども本人の意見ではないし、一生、「一般」の世界と交わらずに暮らすわけではないことを思うと、また、親亡き後のことを心配するならば、過渡期にある人はとても大変だと思うのだが、余計に信用できる社会を作っていくことの方が大事かと思う。
- ・前回平井知事がおっしゃったように、学んだことをことごとく忘れた後に残っていることが教育だとするならば、一緒に学んだという経験こそが、ともに生きる社会にとって、基礎ではないかと思うし、ともに学ぶことなしに、誰も取り残さない社会の実現はないというか、そもそも、これまで1度も触れ合ったことのない、思い浮かばない存在となっはいけないのではないかと思う。
- ・また、大綱の基本的な方向として、言葉としては理想的であるが、多様性を認めることと、誰1人取り残さないことというのは、一般的な社会でもそうであるが、学校教育の中で実現していくのは非常に難しいのではないかと思う。そこにはすべての人が守るべき、何か一本筋の通ったものを納得して共有していくことが必要かと思う。
- ・また、先生方の研修は望ましいけれども、多忙化の解消を考えると、やはりジレンマである。多忙化の解消のために通知表をなくした学校というのが神奈川県にあった。相対的評価ではなく、絶対評価としても、本当に、本来この子はこれくらい伸びるはずだなど評価できるのかと思っていたので、それぞれの単元でどれだけ学べたかというのは、単元ごとにあるテストをさらに評価しなくても、どちらかというテストの結果は、先生が子どもたちに、ここが上手く教えられなかった、などといったことに使ってもらったら良いかと思う。
- ・また、デジタルトランスフォーメーションに関しては、やはり、懸念していた1人1台端末の修理費用とか、更新時の買い替え費用のことも考えていかななくてはならないと思う。
- ・子どものアドボカシー制度については、1月に行われる研修を受けてみようと思っている。もちろん子どもたち一人一人、自分なりの意見を持っていると思うが、一体どんな選択肢を自分が持っているのか、も

しくは世の中にあるのかということを知らなければ、この意見は小さな下の世界のものになってしまうし、何より、思いを相手に伝わるような内容にしてまとめるといった言語化する能力が低い子どもたちが多いように感じているので、大人の側の話の聞き方も含めて、子どもたちに意見を聞くより前にしなくてはならないことがとてもたくさんあるように思う。

- ・最後に、芸術的な価値はよくわからないけれども、アンディ・ウォーホルの作品は私も好きであるし、人気もあって良いと思う。たくさんの方にお越しいただけると思うし、今から美術館の開館がとても楽しみになった。

(中西局長)

- ・続いて、堀江委員にお願いする。

(堀江委員)

- ・日々の学校現場をスクールソーシャルワーカーという立場で回らせていただいたり、先生のお話を聞いたり、子どもたちの様子を見て、というところからのお話になるかと思う。たくさん委員の皆さんがお話してくださったことに、なるほど、そうだなと思うことが多かったので、大羽委員も言っておられたが、重ならないか重なるかといったところでお話する。
- ・ギフトッドという言葉があったかと思うが、私もこのことを思い浮かべた。文科省が発出した令和3年度の3月版の学習指導要領の趣旨の実現に向けた参考資料にも何か言及があったかとは思うのだが、このギフトッドということについて、誰もがギフトッドなのではないかと思う。そのことについて、当然大人、家にいる親、地域の者たちもそうであるが、毎日接する学校の先生たちが、この子一人一人、目の前の子一人一人に「今何に関心があるんだろうな」とか、「何が得意なんだろうな」とか、「どこを伸ばしていきたいと思っているかな」というようなことに、まず関心を寄せてみることに、関心を寄せたときに見つけられるものがあると思う。
- ・その子の中から出てくるものや、やっていることを見て、子どもに「すてきだね」、「こんなことをしたいだね」とか、「こんなことできるだね」、「どうなりたいと思っているの?」と、その時に見つけたこと知らせてあげることで、子どもの中に気づきが生まれて、何か自分を知っていくとか、知ったことを活かして、「もっとこんなふうに暮らしてみたいな」とか、「こんな未来を作っていきたいな」というような、未来に繋がる力になるのではないかと考えている。
- ・やはり、関心を持ってもらうことは、人に関心を持つということにも繋がっていくのではないかと考える。そういったことから、協力するとか、人に貢献するとか、「違うこともあって、それもいいよね」ということが、体感的に伸びていくのかなと思う。
- ・そういう姿勢というのは、職員室の中や、大人同士の関係の中にも生まれてくると、何となく家庭でもそうであるが、自然とそういう雰囲気醸成されて、その中で子どもは安心して自分の力を出し切っていくのかなあと感じる。そのことが学力向上というところにも、何か結びついていかないかなと思う。
- ・そういった視点の大人を育てるというところでいくと、何人か委員の方々からの意見にも出たが、教員養成というか、鳥取県が目指す子ども像を作っていく、大人を作っていく手段というか、育てる方法が、今どういうふうな形になっているのか、これからどうしていこうと考えているのかを知りたいと思う。
- ・不登校なども減らないような状況がある今、減っているところも当然あるが、その中で、やはり学校に行けたらいいだろうと思っている子どもも多くいる。最近、実際に聞いたことであるが、放課後なら行けますという子がいたときに、担任の先生としては、ぜひ来て欲しいと思われるので、放課後に時間を空けておられる。でも、管理職としては、働き方のこととか、いろんなことを思うと、どこまでどうやって協力したらいいのだろう、学校に来たい子は来させてあげたいと思うけれど、というジレンマや、学校以外の場所を勧めることのジレンマも実際にあるのだなということも、ついこの間体験したところである。
- ・そのあたりも、これからの課題にもなるのかな、などと思っている。子どもたちの自己肯定感、自己有用感の育成というところが、次期教育大綱の中期的な取組の方針に出ているが、誰もが、大人も子どもも、そこが育っていけるような雰囲気の醸成ができていくとうれしいと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、山下委員に願います。

(山下委員)

- ・私からは英会話講師という立場から、学力についてお話をさせていただきたいと思う。まず小学校国語、算数が全国平均を下回っていることであるが、最近小学校の方でも英語学習が導入されたということを踏まえて、やはり、この英語と国語のバランスというのはすごく大事なのかなと個人的に思う。
- ・どうしても教科としてというか、試験でのデータというか関連性というの、少し見え辛い部分があるかと思うのだが、一つの使用する言語として、やはりこの国語力というのがしっかりしていないと、なかなか英語力の方も身に付いていき難いのかなと感じるので、やはりその国語のところの土台をしっかりと、まず小学校の若いうちに作ってあげることによって、そこでこの英語力がどんどんそれに上乗せしていき易いのではないかなと感じる。そこをしっかりと注意して、バランスよく両方とも改善していく必要があると思う。
- ・また、大綱にもあったが、国際バカロレア導入は山陰初という事例らしいので、ぜひこれも成功していただきたいと思う。
- ・また、資料8ページの最後の方に英語教育の充実とあり、こちら外部試験を令和5年からの実施を検討中とのことであるが、中学3年は「4技能型」を検討中ということが書いてある。これもぜひ、今までの「読む」とか、「聞く」だけのテストよりも、やはり「4技能」をぜひ導入していただいて、バランスよく子どもたちが使えるようなシステムになると良いと思う。
- ・「話す」ことも強調されているようだが、やはり「話す」ことが一番難しいという方が多い。それは確かに一理あるのだが、実は「書く」ということも学生たちにとってはすごく難しいのではないかと個人的に感じている。職業柄、英検だったり、学校の受検の対策をさせていただくことがあるのだが、やはり、英語で何かを書くときに、例えばテストの和訳などは結構得意な子ども、ある特定のトピックについて自分の意見を書くとなった時に、なかなか意見が出なかったり、どうしても普段国語の作文を書くような順番で書いてしまうと、英語としては微妙な結果に終わったりということもあると思うので、そういうことも英語らしい考え方のもとで、英語らしい書き方を早いうちから練習しておく、例えば高校になって、留学したいという子たちも最近増えており、そうするとやはりアメリカだったらTOEFLという試験で、イギリス方面だったらIELTSという試験を受けないといけないのだが、ともに「4技能」が求められて、内容としては大変難しいので、そういった対策にもなっていくのかなと思う。

(中西局長)

- ・続いて、教育委員の皆様からご意見をいただきたい。森委員に願います。

(森委員)

- ・皆様、たくさんの御意見と非常にわかりやすい御意見を多くいただき、感謝申し上げます。私も、子ども4人を育てながら、多様な子どもたちが育っている。たった4人であるが、多様なことを本当に受け入れざるを得ない私自身もいる。皆様の御意見は、これからの多様性に対するものだったのではないかなというふうに受止めた。
- ・まずその中でも、子どもたちの学力に対する見方、数字の部分と、それから一方で、夢などの評価。これができるという自分への評価。対する部分が非常にアップしているという部分。これもある種、見方の多様性だと思う。こういった見方の多様性を増やして行って、子どもたちのいろいろな側面を見ていくことができるような、大人でありたいなというふうに感じている。
- ・そして教員の皆さんへの一つの課題として私は聞いていたのだが、やはり大綱の浸透、共有ということである。どのようにしてこれを浸透させ共有させて、ゴールとして見て、そしてPDCAでサイクルをしっかりと回して、改善したり、成果を求めたりしていくということ、速やかにしていくのかという現場での効率化、そこが非常に次の課題かなというふうに、聞かせていただいた。
- ・その中で、子どもたちに、すべてを本当に忘れた後にどんな学びが残るのかというのは、私もとても興味深い言葉というよりは、ずっときた言葉である。私のこの年齢になっても残っている学びというのはある。そして、大人になってから学んだことで思い出した学びもある。そういったことを、ゆっくりと自分

自身の人生の中にも生かしていけるような、大人に育つサポートができるような教育現場でありたいと思っている。

- ・皆様の御意見は書き留めさせていただいた。ぜひ、教育委員の中でも、協議していきたいと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、佐伯委員にお願いします。

(佐伯委員)

- ・有識者委員の皆様、貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・私からは、まず学力状況と対応策についてであるが、「とっとり学力・学習状況調査」の結果を現場で活かすことをさらに進めて欲しいと願っている。人と比較するのではなく、生徒児童皆さん自分自身の学力の状況を知る。そして、努力したことが成果として表れていることを実感することや、次の目標を明確にすることで、学習意欲が高まるような生かし方を進めていって欲しいと思っている。
- ・この調査は、学力に向かう力についても変化が捉えられるということであるので、一人一人が主体的に学ぼうとする力がどんなふうに伸びていっているのかということも大切にしたいと思っている。
- ・それから、石原委員もおっしゃっていたが、授業改善というのはやはり学校の体制として全員で取り組んでいくべきものと思う。その成果として、算数では授業改善が進んできたのではないだろうか。国語はやはり結果を見ても、授業改善が急務だと思う。学びに向かう力というものを醸成し、子どもたちが学ぶ喜びを感じられ、感想や意見をまとめたり、発表したりする活動が意欲的に行われるような授業づくりを行って欲しいと思う。そういうことが、先ほどあったように、英語で話すとか書くとかいうことにも、また形は違うかもしれないが、基盤として、やはり国語力が改めて大事だなということは今思っている。
- ・次に、教育に関する大綱の方向性であるが、今の子どもたちを取り巻く環境が非常に複雑で困難なところもあり、その上にコロナ禍で制約が多い生活が続いている。そういう中で、学力とか体力の低下のこと、それから学校生活への不応から問題行動が多くなっているということがとても気になっている。スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーの方との連携は、より一層細やかに進めていかないといけないと思うし、通級指導の体制などの拡充も含めて、やはり特別支援教育の充実というのは欠かせないと思っている。
- ・次に、今の時代、学級経営力が教員には非常に問われている。幾ら少人数学級を進めていただいているとは言っても、集団で生活するということは、やはり互いに折り合いを付け合って活動しなければならない。そういう場面を想定して、どう行動したらいいのか、トラブルになったらどう行動したらよかったのか、というようなことを考えてみる。そして、友達との人間関係づくりを学んでいくことが大事なのではないだろうか。
- ・子どもたちは、自分のことを認めて欲しいという欲求はとても強いのだが、自分とは異なる友達のありようを認められないような傾向になってきているなど、今実感している。子どもたちに問題を投げかけて、自分たちで解決するために話し合う体験を積み重ねて欲しい。困り感とか、それぞれの思いを共有しながら、解決の糸口を見つけて、折り合いを付けるという経験をぜひ積ませて欲しい。そういうことが大事だと思っている。友達が困っていることを受け止めるとか、自分とは違うのだけれども、認められるとかいうような、そんな気持ちが持てることは、社会で生きていく上でとても大切な力になると思っている。学校を休んでいる友達のことが気になるとか、自分にできることはないだろうか、じゃあこれをしてみようかというような、そういう子どもたちを育てていきたいと思っている。
- ・最後に、コミュニティスクールと地域学校協働活動の一体的推進には期待している。地域の方々の温かい見守りや関わりで、子どもたちは自分自身の持っている良さを認められたり、励まされたり、そして居場所ができたり、そんな中で、自己肯定感や自己有用感が高まって行動が変容し、成長していくと信じているからである。

(中西局長)

- ・続いて、若原委員にお願いします。

(若原委員)

- ・まず、「全国学力・学習状況調査」であるが、鳥取県の低下傾向はやはり気になるところである。これは全国平均の方が上がっているということかもしれないが、いずれにしても、好ましいことではないと思う。
- ・私としては、「とっとり学力・学習状況調査」に期待したいと考えている。全国調査の方は、どうしてもその結果を他の都道府県と比較してしまいがちであるし、そのために、試験対策的な発想になりやすいと思う。実際、他県の場合、行き過ぎた試験対策が指摘されている例もあるようだ。それに対して「とっとり学力・学習状況調査」の方は、生徒一人一人の学力の伸びや、学力を支える非認知能力の伸びを経年比較するという調査である。今後、さらにこの調査を継続して、成果を蓄積し、そしてそれを活用していくことに期待したいと思っている。そのことが直ちに全国調査の結果の好結果に繋がるかどうかかわからないが、埼玉県の場合もあるようなので、繋がっていけばなお良いのではないかと期待している。
- ・次に、次期教育大綱であるが、1点だけ学校教育について指摘したいと思う。学校教育も当然ながら社会変化に対応して変化していかなければならない。社会変化、例えば現在の社会変化としては、よく、少子化とか、グローバル化、IT化といったことが挙げられるが、少子化に対しては、学校の適正規模化とか、或いはどういう学校をどこに設置するかという適正配置が課題になると思うし、それからグローバル化に対しては、外国語教育やバカロレア教育が課題になる。
- ・そしてまた、IT化について言えば、この主な取組例のところでは、教育DXという新しい言葉が登場しており、今まで知識基盤社会とか、Society 5.0とか、次々新しい言葉が使われてきているけれども、いずれにしても、このIT化に対応する学校教育の改革が課題になってきている。
- ・そして、そういう社会変化に対応して制度を整えると同時に、その制度を動かすのはやはり人であるので、教員の人材確保と資質向上ということも、また継続して、重要な課題であると思う。そういったことがもうすでにここに挙げられているので、私が改めて指摘することではなかったかもしれないが、一応申し上げた。
- ・それから最後に、県立美術館について、思わぬことで注目され、開館前からこれだけ話題になり注目されているということが、逆に美術館への関心を高めて、今後、プラスの方向に繋がっていけばいいなと思っている。委員の方にも指摘されたことである。
- ・一般に、アートには私の固定観念を壊して私の視野を別の価値観の方にまで広げていくという、そういう力があるように思うのだが、今回のウォーホルについては、全く意表を突かれた思いがした。現在京都でウォーホル展が開かれていて大変盛況のようであるが、ウォーホルだけではなく、日本のポップアートの作品も、例えば、横尾忠則さんとかヒロ・ヤマガタさんとか、有名な方の作品が思い浮かぶのだけれども、そういったものも収集して、これを鳥取の県立美術館の一つの特徴にしたらどうかと思っている。特に若い人には、こういうポップアートについても関心は高いのではないかとと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、中島教育長職務代行者にお願いします。

(中島教育長職務代行者)

- ・まず、学力の伸びが全国平均と比べて今回も芳しい成果をお示しすることができなかったということに関して、私も教育委員として非常に大きな責任を感じている。もちろん数字がすべてではないことは確かであるが、一方で、基礎的な学力とか、或いは現代的な、現在的な思考力判断力みたいなことも含めて、まだまだ鳥取県の教育の中にアップデートしなければいけないところが多分にあるのだなと感じている。
- ・それで、実は最近、私が作った小さい30分ぐらいの芝居を持って、県内13ヶ所、10の学校を回りました。その中で感じたことがあるのだが、当たり前だがやはりその学校ごとにかなり学校文化の違いがある。それで、若い先生でも、ちょっとびっくりするのだけれども、昭和の先生のような振る舞いをされる方が時々あって、割と高圧的に命令口調で、ちょっと軍隊のような感じで子どもたちに指導される場面をポチポチ見た。それで、今、子どもたちの学びとして求められていることは何かということを考えると、一人一人が自分に自信を持って自分で考えて、自分の中で言葉を紡いでいくというようなことを、少しずつ子どもたちにトレーニングしていかなければいけないということを考えると、やはり先生のアップデートも含めた学校文化を変えていくということをまだまだやっていかなければいけない部分があるのだろうなと

現場で感じた。

- ・先ほど、坂本委員から「輝く未来」ということについて、何らかの定義があってもいいのではないかという御意見があった。今の時代、他の方もおっしゃっていたが、一様にこういう人間になりましょう、こういう状況を目指しましょうということではないのだと思う。一人一人がそれぞれの人生について一人一人の幸福を決めて、自分で自分なりの物差しを持って、自分の人生を判断していく。自分の幸せに向かって、今自分がどういう状況にあって、こういうことを頑張りたいなというようなことを選んでいけるような、そういう一人一人の多様性ということに繋がっていくのだと思うのだが、一人一人の幸せ像を持つということ、そこに向かって努力していけるように、大人が子どもたちを支援するということが大事だと思う。
- ・そういう未来に向けてのことを考えても、やはり学校文化を変えるということは、まだまだ意識していかなければいけないことではないかなと思う。
- ・また、そういう一人一人ということを前提とした時に、「全国学力・学習状況調査」と併せて、県版の学力調査というのが、説明もあったように、一人一人がどれだけ伸びているかということをも自分でわかるというものであるのを、これをより生かしていくということも、とても重要なのかなと思っている。
- ・それから、美術館問題が日々いろいろなところで賑わっていて、皆さんのおっしゃる通り、私もこれは基本的には良いことだろうと思っている。例えば印象派とか、ピカソとか、もちろんもっと高いのだが、そういうものを持ってきて、アートだと太鼓判を押されたものとしてあるものを有難がって観るというよりは、そもそもこれは何でアートと呼ばれるのだろうかということを考えさせるような作品が鳥取県にあるということは、とても大きな意味があることではないかと思っている。
- ・というのは、ご承知の通り、ウォーホルはある種アートのルールを変えた人である。鳥取県がこれから発展していくためには、ある種のルールを変えるということをしなないと未来がないようなところがあるのだと思う。そういうことを子どもたちに考えてもらうためにも、このウォーホルというのは、多分に生かしようがあるのではないかと思う。
- ・それから一つ、意外と忘れられていることが、鳥取県は別にウォーホルだけ買うと言っているわけではなくて、いろんな作品を揃えていこうという流れの中で、このウォーホルを位置付けているので、全体展開のことについても、ぜひ県民の皆さんにも御認識いただいて、ウォーホルも大事だけれども他のものも大事ということも、ぜひしっかり伝えていく、知ってもらう必要があるかと思う。
- ・大綱の中に、ぜひこの美術館との絡みというのも、今度がいいのかどうかかわからないが、せっかく新しい美術館ができるわけであるし、美術館をどう教育的に生かしていくかということも、一つ、アートということだけではなくて頭出ししても良いのではないかと思った。
- ・最後に、美術館のことでもう一つ申し上げたいのは、学芸員の方の専門性に対する信頼ということである。やはり重要なことだと思うので、何かしら学芸員の方の恣意的な選択でこうなったような論調が時にあったりもするので、それは決してそういうことではないのだということも、皆さんに理解してもらったら良いのではないかと思っている。

(中西局長)

- ・時間の都合により、先に平井知事に挨拶をお願いします。

(平井知事)

- ・本来は教育長の後であるが、今バタバタしており、ミサイルがまた北朝鮮から打ち上げられ、北海道に向けて今飛んでいる。北海道沖 200 キロあまりのところに落ちそうだというのが今の状況である。申し訳ないが、順番を入れ替えさせていただいた。
- ・いろいろと素晴らしい御意見をいただき、今日は本当に率直に参加させていただいて良かったなというふうに感謝を申し上げたいと思う。後で教育長がいろいろと整理をしながらお話をされると思うし、教育委員会と私ども執行部で今日の議論を生かして、どう大綱に位置付けていくのか、さらに大切なのは石原委員をはじめ、何名かおっしゃったが、大綱を作るだけではなくて、それをどういうふうに現場の教室の中に生かしていくかというのが大事なのだなということも実感させていただいた。
- ・子どもたちを見ながら、それで我々も、この子はこういう特性持っているなと気づいて、語りかけて伸ば

していくと。そういうような作業というのが、やはり見過ごされているのかもしれない。森委員の御指摘の通りなのだろうと思う。そういう意味で、大綱づくりの中でまた皆さんとよく議論をさせていただいて、有機的に、それから組織的に作って子どもたちを育てていく。そういう体制づくりを、ぜひ、来年度以降の話になるかもしれないが、大綱を活かすことを考えていくべきなのかと思う。

- 例えば、教育の授業改革、ここはまだできていないのではないかという話があったが、英語に力を入れやすい時期になってきているのかもしれない。
- 私も個人的に、どちらかというところ最近よく言われる深海魚的な、そういう生徒だったと思う。先生もびっくりするくらい、急に学校の中でも急上昇した時期があったのだが、やはり英語であった。つまらないのであまりやっていたのだったが、英語は何かのきっかけで少し勉強していたこともあったと思う。当時はラジオで割と英語で話したり聞いたりといったことをやっていた時代である。たぶん多くの方が、基礎英語だとか、続基礎英語といったものがあると思うが、あんなことをやって、それで、学校とはまた別のことをしていたということもあった。
- 英語が伸びると国語が伸びる。先ほどのお話にあったが、やはり英語で文章を書く力というのがない。それは実は国語力に繋がっている。だから、多分教科というのは有機的にみんな繋がっているのだと直感的に思っている。多分現場の先生もそれは感じている。委員の皆さんも、そういうのを端で見て感じているのだなと今日は思った。
- 多分我が県の場合、小さな教育の総体であるがゆえに、ネットワーク化が可能であって、そこに何人かの委員がおっしゃったように、ICTを活用することが多分キーになってくるのかもしれない。幸いにして、本県では学校を繋いで、さらに、すべての先生に行き届くような、そういう校務の管理システムを作って、ここで教材共有だとか、考え方の共有や意見の交換ができる。それで横の連帯をしていけば良い教育になってくるのかもしれない。
- 今ICT化が子どもたちにも届いている。タブレット端末をどう活かすかということも、永見委員のお話にあったが、こういうことを上手にやれば、鳥取県は小さい自治体であるがゆえに、市町村を跨いで学力向上を図ることができるのかもしれない。
- それから先生方の方にも目覚めていただき、関心を持っていただくということが多分必要で、昭和の教育を今もやっているというお話もあったが、そういう先生も確かにいるのだと思う。ただ、実は教室の外で連帯するのが大事で、福井県なんかは割とそうである。教科ごとに縦割りになっていて、先生方は横で教え合うというシステムがある。こういうのがやはり、鳥取県で本来できやすいユニットのはずなのであるが、それをもっとやればいいのではないか。ICTもあるというのが、一つのアイデアかなと思いついて伺っていた。
- 美術館については、私も昨日、ヘルメットを被って記者会見に行ったような気分で、どれほど叩かれるかなということだったわけであるが、今日の委員方のお話を聞けば、割と常識的に今後動いていくのではないかなというふうに思う。坂本委員がおっしゃったように、これはビジネスチャンスだ。私もスタバ砂場で、一言で大体30億あまりの経済効果稼いだとはじいているのだが、今回のウォーホールで8億円儲かっているというのが広告屋の算出である。これを生かして、本当の意味の美術館に作り上げていくことができるかもしれないし、そういう意味で大いに論争してもらって、賛否両論を戦ってもらえば戦ってもらうほど、実は美術館の意義が高まると。これがウォーホールが現代美術に向けて放った一矢だというふうに思う。そんな意味で、本質をとらえた議論に持っていきながら、片方で美術館応援に活用できる素地を作っていければなど思っているの、委員の皆様にもぜひ御協力をいただきたいと思う。
- ちなみに鳥取県は学芸員を大事している県であるので、尾崎美術振興監にも申し上げているのだが、ぜひこの状況を楽しんでくださいと。今日もこの絵柄がいいと思った。ぜひこの写真を今後使っていて、ブリロの箱とともにいる眼鏡のおじさんというイメージで、全国で有名になっていただければ、美術館に対する興味も深まっていくのではないかと思っている。

(中西局長)

- ここで知事は退席する。最後になるが、足羽教育長にお願いする。

(足羽教育長)

- ・委員の皆様方、貴重な御意見をたくさん頂戴したことに感謝申し上げます。
- ・まず、石原委員から、学力向上や、それから大綱に絡めて、データが集まってくる。それを、担任だけではなく、学校全体組織でということ、本当に大事な御指摘だったと思う。そして先ほど知事も申された、この大綱やいろんな取り組みが、現場で一人一人の先生方にどう落とし込まれるかということは、本当にこの大綱のみならず、様々なパンフレットや或いは方向、方針を作っても言えることではないかと思っ
- ・それから、大羽委員から、研修等、先生方が忙しい中での効率的にという御指摘もいただいた。そしてまた私の学校訪問についての御指導もいただき、感謝申し上げます。今回は市町村長に、不登校であったり学力であったり部活動のこと、これをしっかり共有していただいてということで回っている。また、なおかつ学校にも行っているが、ノーペーパーで良いということで回らせていただいております、学校の負担にならないように、でも現場の声、様子にしっかり耳、目を傾けるように取り組んで参りたいと思う。
- ・そして個別の支援計画のこと、特別支援教育のこともあり、これは完全に100%できているが、それを生かした指導、体制がどうなのかということには、やはり課題があるように思っている、今後詰めて参りたいと思う。
- ・坂本委員から、先ほど中島教育長職務代行者からもあった、子どもの輝く未来、これはまさしく、子ども一人一人の多様性に応じた姿を描いていくこと。これがやはり教育の理念だと思っ
- ・永見委員から、ICTの活用について御意見があった。センターの研修はホームページ等で案内をしており、私立私学の先生方も参加可能になっている。もし、ご希望等が具体的にあれば、センターの方にも問い合わせいただければと思う。これは公私を超えて、鳥取の子どもたちがICTを自分なりに生かして、この学びの向上に繋げる世界を広げることになるように取り組んで参りたいと思っ
- ・福壽委員、先日の日本PTA中国ブロック研究大会への御尽力に感謝申し上げます。私の思いを伝えさせていただいたこと、届いたことをうれしく思う。おっしゃった学びと生活を繋げる、これは本当に大切なこと。だからこそその体験、経験の大切さ、これをやはり重視すべきなのではないかと思っ
- ・堀江委員から、一人一人の長所や、良いところに目を向けていくこと、そしてそれを大人がまず育てること、このあたりの考え方ということをお尋ねいただいた。まさしく、先生と子どもの関係が子どもたちの学びや姿を高めていく。先生、大人がまず育つこと学ぶことが非常に大事である。そういう意味では、大学の養成段階から、やはり先ほど申した体験、経験、そしてまた、取り組む姿勢を共有するということを通した人間性育成の上に、教員としての必要な資質、能力というものなどが乗ってくる、やはり先生方の人間性を高めることが、子どもたちを引きつける大きな魅力にもなると思っ
- ・最後に山下委員から言葉、言語という観点で国語と英語、このバランスの大切さを御指摘いただいた。私もそのことを国語の元教員として、非常に感じている。言葉の大切さ、そして言葉をいかに相手に伝えていくか。これがすべてであろうというふうに思っている。言語としての扱い、その上に国語であり英語であり、この言葉の大切さをしっかりと伝えていけるような教育の展開を今後検討して参る。

(中西局長)

- ・以上を持って、令和4年度第2回鳥取県総合教育会議を終了する。